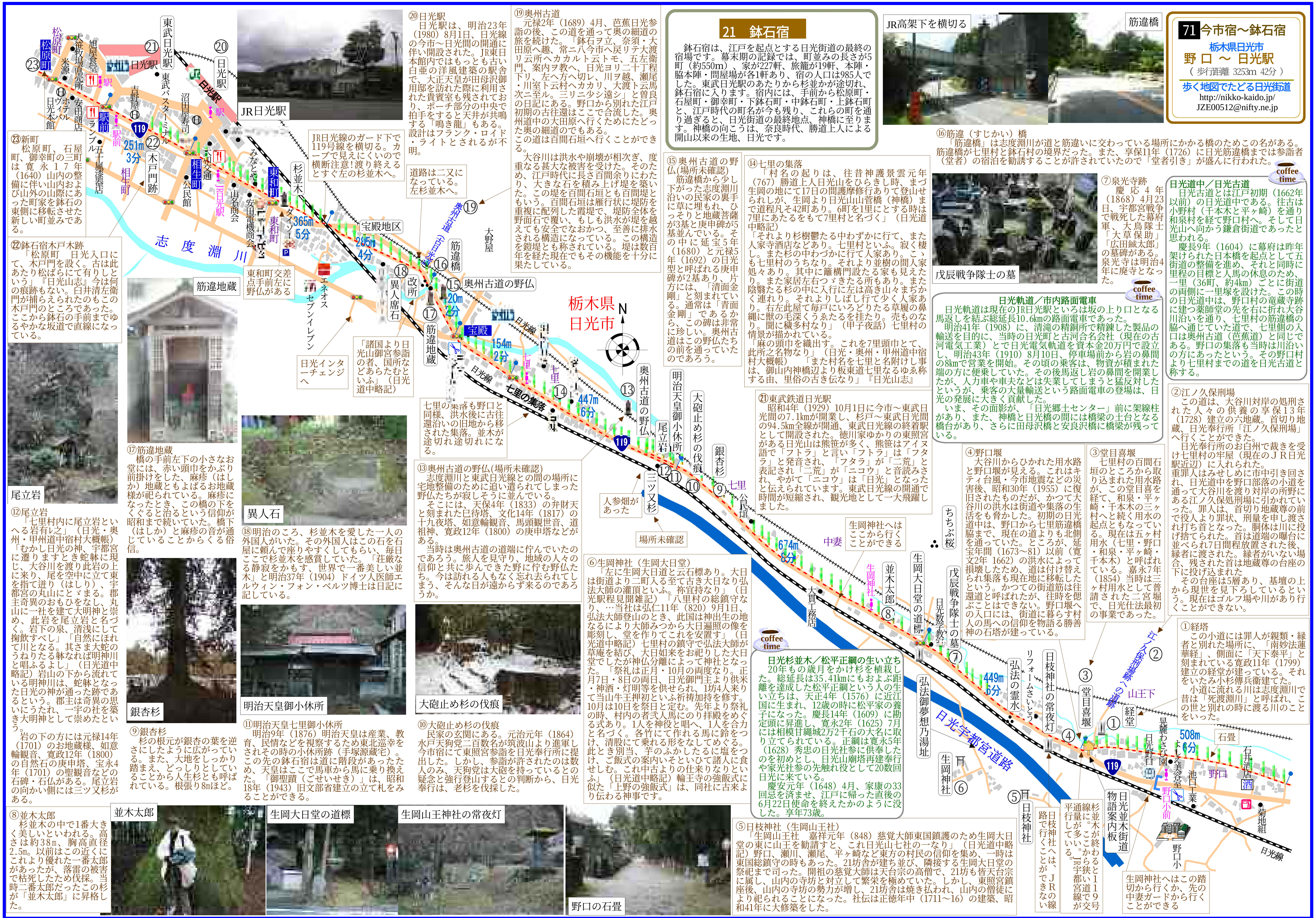
71 今市宿～鉢石宿

栃木県日光市
野 口 ～ 日光駅
（ 歩行距離 3253m 42分 ）

歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp



JR日光線のガード下で119号線を横切る。カーブで見えにくいので横断注意！渡り終えるとすぐ左の杉並木へ。

道路は二又になっている。左杉並木へ。

東和町交差点手前左に野仏がある

日光インターチェンジへ

「諸国より日光山御宮参詣の者、国所などあらたむといふ」（日光道中略記）

七里の集落も野口と同様、洪水後に古往還沿いの旧地から移された集落。並木が途切れ途切れになる。

人参畑があった

場所未確認

生岡神社へはここから行くことができる

日枝神社へは、路で行くことができない JRの線

杉並木が終わるとここから平通量が多い。JR日光線と1行しているい。宇都宮道路1線で9号が交

日光並木街道物語案内板

生岡神社へはこの踏切から行くか、先の中妻ガードから行くことができる

21 鉢石宿

鉢石宿は、江戸を起点とする日光街道の最終の宿場です。幕末期の記録では、町並みの長さが5町（約550m）、家が227軒、旅籠が19軒、本陣・脇本陣・問屋場が各1軒あり、宿の人口は985人でした。東武日光駅のあたりから杉並かが途切れ、鉢石宿に入ります。宿内には、手前から松原町・石屋町・御幸町・下鉢石町・中鉢石町・上鉢石町と、江戸時代の町名が今も残り、これらの町を通り過ぎると、日光街道の最終地点、神橋に至ります。神橋の向こうは、奈良時代、勝道上人による開山以来の生地、日光です。

㉓新町

松原町、石屋町、御幸町の三町は寛永17年（1640）山内の整備に伴い山内および山外の山際にあった町家を鉢石の東側に移転させた新しい町並みである。

㉒鉢石宿木戸木跡

「松原町　日光入口にて、木戸門を設く。古は此あたり松ばらにて有りしという」『日光山志』今は何の痕跡もない。臼井清左衛門が捕らえられたのもこの木戸門のところであった。ここから鉢石の手前までゆるやかな坂道で直線になっている。

⑫尾立岩

「七里村内に尾立岩といへる岩有レ之」（日光・奥州・甲州道中宿村大概帳）「むかし日光の神、宇都宮に遷りますとき蛇躰に現じ、大谷川を渡り此岩の上に来り、尾を空中に立て東を指て迸り（はしり）、宇都宮の丸山にとゞまる。郡主奇異のおもひをなし、丸山に一社を建て大明神と崇め、此岩を尾立岩と名づく。岩下の泉、清浅にして掬飲すべし」「自然にほれて川となる。其さま大蛇のうねりたる躰なれば明神川と唱ふるよし」（日光道中略記）岩山の下から流れている明神川は、蛇躰となった日光の神が通った跡であるという。郡主は奇異の思いにうたれ、一宇の社を築き大明神として崇めたという。

岩の下の方には元禄14年（1701）のお地蔵様、如意輪観音、寛政12年（1800）の自然石の庚申塔、宝永4年（1701）の聖観音などの石碑・石仏がある。尾立岩の向かい側には三ツ又杉がある。

⑧並木太郎

杉並木の中で1番大きく美しいといわれる。高さは約38m、胸高直径2.5m。以前はこの近くにこれより優れた一番太郎があったが、落雷の被害で枯死したため伐採。当時二番太郎だったこの杉が「並木太郎」に昇格した。

⑰筋違地蔵

橋の手前左下の小さなお堂には、赤い頭巾をかぶり前掛けをした、麻疹（はしか）地蔵ともよばるお地蔵様が祀られている。麻疹になったとき、この橋の下をくぐると治るという信仰が昭和まで続いていた。橋下（はしか）と麻疹の音が通じていることからくる俗信。

⑨銀杏杉

杉の根元が銀杏の葉を逆さにしたように広がっている。また、大地をしっかり踏まえ、どっしりとしていることから人生杉とも呼ばれている。根張り8mほど。

⑱明治のころ、杉並木を愛した一人の外国人がいた。その外国人はこの石を石屋に頼んで座りやすくしてもらい、毎日ここで杉並木を感賞していた。「荘厳なる静寂をかもす、世界で一番美しい並木」と明治37年（1904）ドイツ人医師エルウィン・フォン・ベルツ博士は日記に記している。

⑪明治天皇七里御小休所

明治9年（1876）明治天皇は産業、教育、民情などを視察するため東北巡幸をされその時の小休所跡（手塚源蔵宅）。この先の鉢石宿は道に階段があったため、天皇はここで馬車から馬に乗り換えた。「御聖蹟（ごせいせき）」は、昭和18年（1943）旧文部省建立の立て札をみることができる。

⑳日光駅

日光駅は、明治23年（1980）8月1日、日光線の今市～日光間の開通に伴い開設された。JR東日本館内ではもっとも古い白亜の洋風建築の駅舎で、大正天皇が田母沢御用邸を訪れた際に利用された貴賓室も残されており、ポーチ部分の中央で拍手をすると天井が共鳴する「鳴き龍」もある。設計はフランク・ロイド・ライトとされるが不明。

⑲奥州古道

元禄2年（1689）4月、芭蕉日光参詣の後、この道を通って奥の細道の旅を続けた。「鉢石ヲ立、奈須・大田原へ趣、常ニハ今市へ戻リテ大渡リ云所ヘカカルト云トモ、五左衛門、案内ヲ教へ、日光ヨリ二十丁程下リ、左へ方へ切レ、川ヲ越、瀬尾・川室ト云村ヘカカリ、大渡ト云馬次ニ至ル。三リニ少シ遠シ」と曽良の日記にある。野口から別れた江戸初期の古往還はここで合流した。奥州道中の大田原へ行くためにたどった奥の細道のでもある。この道は百間石垣へ行くことができる。

大谷川は洪水や崩壊が相次ぎ、度重なる甚大な被害を受けた。そのため、江戸時代に長さ百間余りにわたり、大きな石を積み上げ堤を築いた。この堤を百間石垣とも百間堤ともいう。百間石垣は雁行状に堤防を重複に配列した霞堤で、堤防全体を野面石で覆い、もしも洪水が堤を越えても安全でなおかつ、至善に排水される構造になっている。この構造を鎧堤とも称されている。堤は数百年を経た現在でもその機能を十分に果たしている。

⑬奥州古道の野仏(場所未確認)

志度淵川と東武日光線との間の場所に宅地整備のために追い遣られてしまった野仏たちが寂しそうに並んでいる。

そこには、天保4年（1833）の弁財天と刻まれた巳待塔、文化14年（1817）の十九夜塔、如意輪観音、馬頭観世音、道祖神、寛政12年（1800）の庚申塔などがある。

当時は奥州古道の道端に佇んでいたのであろう。旅人を見守り、地域の人々の信仰と共に歩んできた野に佇む野仏たち。今は訪れる人もなく忘れ去られてしまう、そんな日が遠からず来るのであろうか。

⑩大砲止め杉の伐痕

民家の玄関にある。元治元年（1864）水戸天狗党二百数名が筑波山より進軍し今市宿にて東照宮参詣を日光奉行所に提出した。しかし、参詣が許されたのは数人のみ、天狗党は大砲を持っているとの疑念と強行登山するとの判断から、日光奉行は、老杉を伐採した。

⑥生岡神社（生岡大日堂）

「左に生岡大日道と云石標あり。大日は街道より二町入る至て古き大日なり弘法大師の灌頂といふ。祢宜持なり」（日光駅程見聞雑記）「八里村の総鎮守なり、…当社は弘仁11年（820）9月1日、弘法大師登山のとき、此国は神出生の地なるにより大師みつから大日遍照の像を彫刻し、堂を作りてこれを安置す」（日光道中略記）七里村の鎮守で弘法大師が草庵を結び、大日如来をお祀りした大日堂でしたが神仏分離によって神社となった。「祭礼は正月・10月の両度なり。正月7日・8日の両日、日光御門主より供米・神酒・灯明等を供せられ、1坊4人来りて当山牛王押初といふ祈祷加持を修す。10月は10日を祭日と定む。先年より祭礼の時、村内の者弐人馬にのり拝殿をめぐる式あり。1人を神役と唱へ、1人を合力と名づく。各竹にて作れる馬に鈴をつけ、清股にて乗れる形をなしてめぐる。此とき別当、芋のふかしたるに塩をつけ、ご飯式の案内いそといひて諸人に食せしむ。これ中古よりの仕来りなりといふ」（日光道中略記）輪王寺の強飯式に似た「上野の強飯式」は、同社に古来より伝わる神事です。

⑮奥州古道の野仏(場所未確認)

筋違橋から少し下がった志度淵川沿いの民家の裏手に草に埋もれ、ひっそりと地蔵菩薩が3基と庚申碑が5基並んでいる。その中に延宝5年（1680）と元禄5年（1692）の日光型と呼ばれる庚申碑が2基あり、片方には、「清面金剛」と刻まれている。通常は「青面金剛」であるから、この碑は非常に珍しい。奥州古道はこの野仏たちの前を通っていたのであろう。

⑭七里の集落

「村名の起りは、往昔神護景雲元年（767）勝道上人日光山をひらきし時、まづ生岡の地にて17日の間護摩修行ありて登山せられしが、生岡より日光山山菅橋（神橋）まで道程凡そ42町あり。6町を1里にとする時は7里にあたるをもて7里村と名づく」（日光道中略記）

「それより杉樹鬱たる中わずかに行て、また人家寺酒店などあり。七里村といふ。寂く棲し。また杉の中わづかに行て人家あり。こゝも七里村のうちなり。それより並樹の間人家処々あり。其中に籬構門設たる家も見えたり。また家居左右つゞきたる所もあり。また陰翳たる杉の中に入行に左は高き山々まぢかく連れり。それよりしばし行て少く人家あり。右左此屋て毎戸にいろどりたる草履の鼻縄に獣の毛深くうゑたるを挂たり。売ものなり。聞に穢多村なり」（甲子夜話）七里村の情景が描かれている。

「麻の頭巾を織出す。これを7里頭巾とて、此所之名物なり」（日光・奥州・甲州道中宿村大概帳）　「また村名を七里と名附けし事は、御山内神橋辺より板東道七里なるゆゑ称する由、里俗の古き伝なり」『日光山志』

㉑東武鉄道日光駅

昭和4年（1929）10月1日に今市～東武日光間の7.1kmが開業し、杉戸～東武日光間の94.5km全線が開通、東武日光線の終着駅として開設された。徳川家ゆかりの東照宮がある日光山は熊笹が多く、熊笹はアイヌ語で「フトラ」と言い「フトラ」は「フタラ」と発音され、「フタラ」が「二荒」と表記され「二荒」が「ニコウ」と音読みされ、やがて「ニコウ」は「日光」となったと伝えられています。東武日光線の開通で時間が短縮され、観光地として一大飛躍しました。

⑤日枝神社（生岡山王社）

「生岡山王社　嘉祥元年（848）慈覚大師東国鎮護のため生岡大日堂の東に山王を勧請すと、これ日光山七社の一なり」（日光道中略記）野口、瀬川、瀬尾、平ヶ崎など東方の村民の信仰を集め、一時は東国総鎮守の時もあった。21坊舎が建ち並び、隣接する生岡大日堂の祭祀まで司った。開祖の慈覚大師は天台宗の高僧で、21坊も皆天台宗に属し、山内の寺坊と対立して繁栄を極めていた。しかし、東照宮鎮座後、山内の寺坊の勢力が増し、21坊舎は焼き払われ、山内の僧徒により祀られることになった。社伝は正徳年中（1711～16）の建築、昭和41年に大修築をした。

⑯筋違（すじかい）橋

「筋違橋」は志度淵川が道と筋違いに交わっている場所にかかる橋のためこの名がある。筋違橋が七里村と鉢石村の境界だった。また、享保11年（1726）に日光筋違橋までは参詣者（堂者）の宿泊を勧誘することが許されていたので「堂者引き」が盛んに行われた。

⑦泉光寺跡

慶応4年（1868）4月23日、宇都宮戦争で戦死した幕府軍、大鳥隊士「大草保助」「広田鋮太郎」の墓碑がある。泉光寺は明治4年に廃寺となった。

coffee time

日光軌道／市内路面電車

日光軌道は現在のJR日光駅といろは坂の上り口となる馬返しを結ぶ総延長10.6kmの路面電車であった。

明治41年（1908）に、清滝の精銅所で精錬した製品の輸送を目的に、当時の日光町と古河合名会社（現在の古河電気工業）とで日光電気軌道を資本金20万円で設立し、明治43年（1910）8月10日、停車場前から岩の鼻間の8kmで営業を開始。その頃の乗客は、物資が積まれた端の方に便乗していた。その後馬返し岩の鼻間を開業したが、人力車や車夫などは失業してしまうと猛反対したというが、乗客の大量輸送という路面電車の登場は、日光の発展に大きく貢献した。

いま、その面影が、「日光郷土センター」前に架線柱があり、また、神橋と日光橋の間には橋梁の土台となる橋台があり、さらに田母沢橋と安良沢橋に橋梁が残っている。

coffee time

日光道中／日光古道

日光古道とは江戸初期（1662年以前）の日光道中である。往古は小野村（千本木と平ヶ崎）を通り和泉村を経て野口村へ。そして日光山へ向かう鎌倉街道であったと思われる。

慶長9年（1604）に幕府は昨年架けられた日本橋を起点として五街道の整備を進め、それと同時に里程の目標と人馬の休息のため、一里（36町、約4km）ごとに街道の両側に一里塚を設けた。この時の日光道中は、野口村の竜蔵寺跡に建つ薬師堂の先を右に折れ大谷川沿いを通り、七里村の筋違橋の脇へ通じていた道で、七里側の入口は奥州古道（芭蕉道）と同じである。野口の集落も当時は川沿いの方にあったという。その野口村より七里村までの道を日光古道と称する。

coffee time

日光杉並木／松平正綱の生い立ち

20年もの歳月をかけ杉を植栽した。総延長は35.41kmにもおよぶ距離を達成した松平正綱という人の生い立ちは、天正4年（1576）に近江国に生まれ、12歳の時に松平家の養子になった。慶長14年（1609）に勘定頭に昇進し、寛永2年（1625）7月には相模甘縄城2万2千石の大名に取り立てられている。正綱は寛永5年（1628）秀忠の日光社参に供奉したのを初めとし、日光山廟塔再建奉行や家光社参の先触れ役として20数回日光に来ている。

慶安元年（1648）4月、家康の33回忌を済ませ、江戸に帰った直後の6月22日使命を終えたかのように没した。享年73歳。

④野口堰

大谷川からひかれた用水路と野口堰が見える。これはキティ台風・今市地震などの災害後、昭和30年（1955）に復旧されたものだが、かつて大谷川の洪水は街道や集落の生活をも脅かした。初期の日光道中は、野口から七里筋違橋脇まで、現在の道よりも北側を通っていた。ところが、延宝年間（1673～81）以前（寛文2年 1662）の洪水によって損壊したため、道は付け替えられ集落も現在地に移転したという。かつての街道筋は往還道と呼ばれたが、往時を偲ぶことはできない。野口堰への入口には、街道に暮らす村人の馬への信仰を物語る勝善神の石塔が建っている。

③堂目喜堰

七里村の百間石垣のところから取り込まれた用水路が、この堂目喜を経て、和泉・平ヶ崎・千本木の三ヶ村へと続く用水の起点ともなっている。現在は五ヶ村用水（七里・野口・和泉・平ヶ崎・千本木）と呼ばれている。嘉永7年（1854）当時は三ヶ村用水として普請された二宮堀で、日光仕法最初の事業であった。

②江ノ久保刑場

この道は、大谷川対岸の処刑された人々の供養の享保13年（1728）建立の六地蔵。首切り地蔵、日光奉行所「江ノ久保刑場」へ行くことができた。

日光奉行所のお白州で裁きを受け七里村の牢屋（現在のＪＲ日光駅近辺）に入れられた。重罪人はみせしめに市中引き回され、日光道中を野口部落の小道を通って大谷川を渡り対岸の所野にある江ノ久保処刑場に引かれていった。罪人は、首切り地蔵尊の前で役人より罪状、刑量を申し渡され打ち首となった。胴体は川に投げ捨てられた。首は道端の曝台に並べられ7日間程放置された後、縁者に渡された。縁者がいない場合、残された首は地蔵尊の台座の下に投げ込まれた

その台座は5層あり、基壇の上から現世を見下ろしているという。現在はゴルフ場や川があり行くことができない。

①経塔

この小道には罪人が親類・縁者と別れた場所に、「南妙法蓮華経」、側面に「天下泰平」と刻まれている寛政11年（1799）建立の経堂が建っている。それをいたみ小杉傳兵衛建てた。

小道に流れる川は志度淵川で昔は「死渡淵川」と呼ばれ、この世と別れの時に渡る川のことをいった。